

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇塩ビを使って節約しよう

－英国プラスチック工業連盟のビデオ動画より－

## ■随想

◇古代ヤマトの遠景（71）－【磐井の乱（4）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

◇塩ビを使って節約しよう

－英国プラスチック工業連盟のビデオ動画より－

冬のこの時期、朝起きると窓がびっしり結露しているといった経験はありませんか？この結露を見るたびに樹脂窓のフレーズ“樹脂窓は日本の元気な住宅を応援します。樹脂窓と暮・ら・そ・う”が頭をよぎります。

このフレーズは、塩ビ工業・環境協会のホームページにある[樹脂窓に関するページ](#)にあるものです。樹脂窓は、断熱・遮熱、気密性に優れ、窓から逃げたり入ったりする熱量が少なく省エネ効果があり、さらには、防音効果、結露予防などの効果も発揮することがよく知られています。

昨年末の「[環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム](#)」でも話題になりましたが、樹脂窓も省エネ、CO2削減、長く使っていける住宅に効果があると期待されます。もちろん、省エネにつながるということは、経済面でもメリットも大いにあります。

洋の東西を問わず、塩ビの用途別分野では、建材分野が6～7割を占めています。そんな中、建物に、塩ビ製品を使わずに他の材料製品を使ったら、どのくらいコストがかかるのか？について調査した英国の自治体があります。英国のプラスチック工業連盟（British Plastic Federation）は、このBrighton & Hove Cityの調査報告書などを元に、塩ビ製品を選択することで達成可能な節約ができることを紹介した[ビデオ動画を作成し、ホームページに掲載](#)しています。



ビデオ動画のキャラクター

それによると、塩ビ製の窓（樹脂窓）、ドア、雨どい、パイプ、床材、ケーブルを使うと、合計5年間で3600万ポンド(約51億円)の節約になり、当地域の1世帯あたりに換算すると約315ポンド(約4.5万円)節約に相当することがわかったとのこと。特に、窓に関する評価としては、塗装の塗り替えなどのメンテナンスコストだけで、120万ポンド/年の

節約も見込まれるほか、熱効率の面でも注目され、寒い時期の暖房費の節約にもつながります。環境問題に厳しい緑の党が第一党を占める Brighton & Hove City の調査ということもあり、興味ある結果です。

なお、塩ビ製窓枠は、BFRC(英国窓格付け評議会)の格付けでは、A あるいは A+の高い評価を獲得しています。また、もうひとつの報告書として、同じ費用で、木製窓の2倍の量の塩ビ製窓を設置できるとした Stockton-on-Tees Council による調査も採り上げられています。

さらに、LCA の点で、塩ビはベスト代替材料との結論が出されたとする EU が行った LCA レポート (Life Cycle Assessment of PVC and of Principal competing materials) の結果より、塩ビ製品は、

1. 安全で、
2. 大きな環境影響がなく、
3. 価格がそれほど高くない

といった良い価値があるので、頼りになる材料であるとまとめています。

動画を[こちら](#)からご覧になれます。

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（7 1）－【磐井の乱（4）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

#### <磐井の乱の真実（続）>

前回までに、朝鮮半島における倭国の権益を守るか否かについて、倭国内で激論が戦わされ、磐井をはじめとする半島放棄派の意見までを紹介した。これに対し、当然半島堅持派が存在した。その張本人こそが、若き将来の欽明天皇だったと考えられる。当時二十歳そこそこだったと考えられる未来の天皇は、

「現に、助けを求めてきている金官国を見殺しにするのか、金官国あってこそ、我国は鉄の恩恵をこれまで受けることが出来たのではないのか、任那を堅持するのは先王のご意思ではなかったのか、継体天皇のご意思に背くようなことが許されるのか。」

といった趣旨のことを主張したのではなかろうか。純粋な正義感に溢れる言葉に、その場の者は、暫し反論が出来なかったのかも知れない。このとき若き皇子に賛同し、強力に支持する者が現れた。それが蘇我氏だったと考えられる。蘇我氏は腹を決めてこの皇子を援護したのである。このようにして二つの意見は対立し、両派の論争は何度か繰り返されたと考えられるが、妥協点を見出すことは出来なかった。最後は腕力しかない。この武力闘争に入る直前に蘇我氏は手を打った。本格的な戦いとなれば、とても勝ち目は無いと見た蘇我氏は、勾大兄皇子と檜隈高田皇子を急襲したのである。

ここに、継体天皇の後継者問題と半島政策問題は急転直下解決した。当時の勢力分布として、継体天皇が男大迹王として立ち上がった当時の、支持勢力は殆どが二皇子支持に回っていたものと見られる。更に大伴・物部の勢力がこれに加わるのである。これに対する

欽明派は蘇我氏と、恐らく阿倍氏が強力な支持者に回っていたはずであり、これ以外にも支持勢力は存在していたと考えられる。しかし、全体として見れば二皇子派の方が圧倒的に有利だったはずである。そのような中での蘇我氏、具体的には蘇我稲目による二皇子殺害は窮鼠猫を囓む、の行為だったといえよう。

継体崩年に関する三説の存在から、辛亥の年〔継体二十五(五三一)、天皇没年〕に皇位継承を巡るクーデターが起きたとする説は良く知られており、これを「辛亥の変」というが、本考の考え方も辛亥の変を想定していることになる。原因として、磐井が主張したと想定している半島放棄論がその根底にあるとする点が諸説とは異なっているが、ここではこれ以上の比較論は行なわないことにする。

倭国内の覇権争いとその結果を知らされる前に、金官国王は新羅に降った。金官国投降の知らせが倭国に届いたとき、蘇我氏は磐井討伐を新しい天皇に進言した。表向きは金官国支援反対がその理由であるが、磐井が北部九州において巨大な勢力となっていたことへの恐怖感とその本音だったと考えられる。蘇我氏にとって将来の大きな阻害要件になると判断したのである。

欽明天皇は大伴金村と物部麴鹿火にその討伐を命じた。自分の意見に賛同しなかった兩人に対する、懲罰的意味合いがあったといえる。これまでのような

経緯から、天皇に意見を述べることも出来なくなっていた彼らは、その命に従うしかなかったはずである。磐井は半島堅持政策に反対した人物として、更に倭国が金官国を失う原因を作った張本人として制圧されたことになる。彼は新羅に通じて討たれたのでもなく、九州を代表する勢力として、時の朝廷に反乱を起こして討たれたのでもない。



岩戸山古墳（磐井の墳墓）前方部に作られた神社

筑紫国造磐井は、最も明晰にその時代を見通していた地方豪族だったのである。その具眼の士にして継体天皇の忠臣ともいべき人物を、蘇我氏は泥まみれにして歴史の一隅に釘付けにした。磐井は反乱を起こした逆賊とされ、その戦いは「磐井の乱」として、歴史の中で語り継がれることとなった。彼は、蘇我氏にとっての忌まわしい事件を覆い隠すための犠牲者だったのである。

### <古代歴史の改竄>

このように見てくると、磐井討伐と継体天皇の皇子殺害とはワンセットの事件だったことになる。このような史実をどのようにして隠蔽するのか、これが蘇我氏にとってのその後の最大の難題となる。「帝紀」・「旧辞」は欽明朝頃に編纂されたのではないかとの津田左右吉の説が定説となっているが、蘇我氏の立場から見ても、欽明天皇との緊密な関係が保たれている時期に、歴史を改竄しておく必要があり、このような理由からも王家の記録編纂事業の開始は欽明朝で無ければならなかったのである。

改竄内容は、磐井の事件を継体治世下の事件とすること、二人の皇子をそれぞれ即位した天皇として記録すること、といったものだったと考えられる。現在の書紀に見られるよ

うな内容は、その後、推古朝になり蘇我氏の天下となったときに改めて加筆訂正されたものと考えられる。

最終的に現在の日本書紀の形にまとめられたとき、持統朝の撰述者は当然この歪められた歴史は知っていた。しかし、およそ百年に亘って伝承されてきた正史を軽々しく書き改めることは出来ない。そこで、撰述者は、先ず、継体天皇の崩年を正しい年に修正した。その理由は、継体天皇と磐井討伐は無関係であることを後世に知らせたかったのである。「後に<sup>かむが</sup>勘校へむ者、知らむ」と謎めいた言葉を残し、暗に史実を知らせようとした。

次に彼は安閑天皇の即位元年を、書き出しでは自分が修正した継体崩年に繋いで、五三二年としておきながら、最後には太歳<sup>たいさいきのえとら</sup>甲寅（五三四）と書いて空白の二年を作った。太歳甲寅とは安閑天皇の即位元年は、甲寅年であるという意味で、書紀には各天皇の即位元年が元年記事の最後に記されている。継体天皇の崩年を継体二十八年（甲寅、五三四）から二十五年（辛亥、五三一）に上げたことで、ここで想定している五三三年の磐井討伐が安閑朝の事件となってしまう、このことを避けるため、矛盾を承知で太歳甲寅を書き記したものと見られる。

この空白の二年は後世の人々を大いに悩ませることとなったが、これも撰述者の後世へのメッセージだったのである。

大伴氏・物部氏を飛び越え、天皇の側近第一となった蘇我稲目は、自分の娘である<sup>きたしひめ</sup>堅塩媛を天皇の妃に入れ、その皇子・皇女の中から後の用明天皇と推古天皇を誕生させている。

このような蘇我氏の欽明天皇との深い関係は、これまでに述べてきたような事件を背景にして見れば甚だ明快なものとなってくる。五三一年の欽明天皇即位（欽明元年は五三二年）から、蘇我蝦夷が六四五年の乙巳<sup>いつし</sup>の変で中大兄皇子達に討たれるまでの、約百年間が蘇我氏の時代であり、推古朝がその全盛時代だったことになる。

欽明天皇誕生当時、大伴氏は半島放棄派としてその態度は明快だったのではなかろうか。それだけに、彼らの没落も早かったということである。任那四県の割譲問題が、彼らの凋落の直接の原因であるかのような書き方がされているが、四県割譲は史実としても新羅が不満を持つような筋合いのものでもなく、単なるロジックとしてこのような問題が創作されたといえる。

物部氏の場合は、大伴氏よりは、もう少し巧妙に立ち回ったと見られるが、一たび、天下の形勢が蘇我氏の方へ傾き始めると、行政部門の重鎮として歴代天皇に仕えてきた物部氏といえども、その権力基盤を保持し得なかったといえる。書紀の中では仏教導入をめぐる確執が、両者の争いのような記述がされているが、これは表面に現れた一つの現象に過ぎず、その本質は最早、最高権力者となった倭王をめぐる、主導権争いだったということである。崇峻天皇の即位前に、万策尽きた物部氏は蘇我馬子に討たれる。五八七年のことである。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)



## ■ 編集後記

早いもので、1月も最後の日となり、2012年度も終わりに近づいています。

どんな小さなことでも自分のアイデアが周りに受け入れられるとうれしいものです。

2年ほど前、地元の市立図書館に行ったとき、図書館利用についてのアンケートへの協力を求められました。その際、あることを提案していましたが、その後、すっかり忘れていました。ところが、久しぶりに行った図書館でその改善提案が受け入れられているのに気づいたのです。いや、他にも同じような提案をした人がいたかもしれませんが、自分の提案が、その年度ではなく、翌年度の実施につながったのだと勝手に思い、とにかくうれしくなりました。(HI)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)